

## 詩歌：文苑

著者	湯原，元一，秋月，胤繼，隈本，繁吉，白河，次郎， 稼堂，巴城，受樂院，義春
雑誌名	龍南會雜誌
巻	30
ページ	60-62
発行年	1894-11-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4458">http://hdl.handle.net/2298/4458</a>

今日の悲しさは夢の中にも夢を見るこゝろすれ昔ある人はしばしのわかれを惜みて、

一日たに見ねはこひしき君の去きは年の四とせをいかてすこさんといひ去こともありしかばいはんや今日は、

一目たにこひしき君に別れつゝ年の三とせをいかてすきけん。

かきくらす涙に、そぼちつる袖の雫に、文字もをさゝゝしどけなく消ぬはてゝたゝかりこもの思ひ亂れたるのみにこそ。うもゝゝ明治の御稜威はいよゝゝ教育の光に輝き、學校の榮はますゝゝ、五百のを去へ子に満ちあんとす。うのこゝらのをしへ子たち、うち集ひて、まめやかに、けふのみまつり、仕へ奉るさまを、安らげく、きこしめして、この始ある人人の、さながら、終をよくせんことを、天翔りても、見そあはし、守り給へかし、とをしへづかさの、しりへを汚せる園哲雄、謹み額つきて申す。

贈従軍友人

講師 湯原 元一

時事有感

秋月 胤繼

何時快劍斬君讐、八道風雲隻手收、閔族初無經、國志袁奴元有爲、身謀亂餘天地秋、將老劫外江山月、亦愁莫吊英雄征戰跡、倭城城下水空流。

堂堂大陸跨兩極、六大洲中最廣域、可憐西夷奪掠餘、僅存日支兩三國、前門有虎後門狼、東洋風雲轉、悽愴沈思到此腸、欲斷須厚隣誼、警非常、愛親覺羅何碌碌、乃利少弱拋隣陸、日東天子怒赫焉、三軍直征海與陸、何

敵堂堂王者師。連戰連敗不能支。先如脫兔後處女。滿朝狼狽我解頤。韓山清虜已掃屏。我兵方及盛京省。王師出沒如鬼神。兩都陷落在食頃。雄武桓桓震四隣。皇威稜稜字內伸。聞說外夷恐我勢。將容啄使謀和親。和親從來屢誤事。勿安小成遺後累。於今輕率失此機。他日嚼臍復何暨。速服清虜彼已平。東洋平和乃可成。我於是乎爲盟主。永遠相戒。鴉蚌爭。可期斃。今可期斃。既期斃。今事乃濟。苟以此心對外夷。豺狼雖猛何能噬。嗚呼高義如我世界無。抑驕憐弱壯。皇圖想見營營趨利輩。對照能得無耻乎。

梧園先生曰結末最妙足使英露抱愧感服

又

東洋君子國。魏魏六洲叢。所據道兼義。所行公與明。制驕因烈志。援弱卽慈情。虛喝彼何者。詐謀豈敵誠。

第四紀念會寄懷于熊城學友諸君

在帝國大學 隈本 繁吉

稍烟簇。彈雨漲。韓山地。渤海洋。羯虜無道非一日。衰龍赫怒膺。又懲。真是空前絕後業。神州黎庶報國忙。獨憶天下青衿子。依然對卷讀書堂。國恩由來深於海。如今更覺包八荒。嗚呼騷人躍筆入胡塞。赴夫拋身屠豺狼。既聞尙綱勞奔命。又見老幼饋壺漿。獨憶體軀健全措大漢。晏然吟誦翰墨場。國恩由來高乎岳。如今更覺凌九蒼。東西客雲山茫。感國恩共無量。遙祝第四紀念會。幾多感慨斷吾腸。寄語熊城六百濟々士。君不見同心如蘭令校運昌。昌校運增國光。千秋萬古幾不忘。

祝詩

在帝國大學 白河 次郎

高堂占得萬斯基。闔校聲名逐日馳。學苑好風兄友弟。講壇和氣父薰兒。修文事逸未曾慣。用武處難豈敢辭。此日熊城秋更靜。龍南

龍、北、仰、威、儀、

梧園先生百合作述實難得這平穩

たのか身にまひさむき此夜は

秋の夜よめる 稼 堂

熊本ある第五高等學校の開校紀念  
會を祝ひてよめる

ゆふされは天の川風ふきちらて

在帝國大學 受樂院義春

庭のさゝはら音さやくなり

年ごとにまける小松にさかえゆく

をりにふれて 巴 城

學ひの園の色を見えける

もろあしの醜のは草も日の本の

谷川のあかれをよもにつとへきて

刀の風にあひさやはせぬ

すみやまさらむしら川の水

木の下に夢もむすはぬ武士の

批評

活道徳經——『養神』を讀みて

淺 川 學 人

前號の紙上に『養神』といふ一篇あり、小原君の筆なり、議論正確、文辭も亦爽麗なり、讀みて大に快を覺ゆ、おのれ今此に記さんとするもの、或は夫の彼詩の一句は彼詩の一篇なり、Every child is a poet for a canto. といへる笑を買ふか買はぬか知らされども、さにかくおのれに「筆を、一給へ」。

おのれ、かれてより天の聲といふ言を聞けり、されど其心は知らざりしが、或夜徒然なるまゝ、例の古歌ども打ち誦してありけるに、ゆくりなく思ひあたる處あり、其れより一二日をへて花見にいでしに、いよいよ天の聲といふを知りぬ。

具原益軒翁が大和俗訓に仁は天地の心なりといへり、實に天地に心あるなり、貴賤を隔てず能く我を愛す、此愛唯我を娛ばしむるには